

講演会報告

レオナルドの頃のヴァレリー

今井 勉

2005年10月26日、東北大学大学院文学研究科にて、パリ第四大学教授ミシェル・ジャルティ Michel JARRETY 氏による講演会「テスト氏とレオナルドの頃のヴァレリー—*Valéry à l'époque de Teste et Léonard*」が開催された。時間の関係で、実際には、『テスト氏との一夜』関係の部分が割愛され、ヴァレリーのデビュー論文『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』に関する部分に話題が絞られた。あらかじめ戴いたテキストをもとに、今井が訳文と資料を準備し、ジャルティ氏のお話を段落ごとに説明してゆく「二声」形式を採らせていただいた。氏は現在、ヴァレリーの本格的な伝記を執筆中であり、ファイヤール社からの刊行が予定されている（千ページほどの大作になるとの由）。この伝記のお仕事に基づく今回の講演には、新たな知見が随所に織り込まれており、ヴァレリーを研究する者のひとりとして、教えられるところが非常に多かった。氏のお話の流れを要約すると以下の通りである。

初めての注文原稿となった『序説』は、理論的であると同時に詩的・芸術的なテキストとして高度な達成を示している。しかし、ヴァレリー自身は、執筆の途上で、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌の期待する方向に添うべきか、それとも、自分自身が目指すテキストを書くべきか、このジレンマにかなり迷った形跡がある。1894年12月に注文を受けてから三ヶ月弱ほどで原稿を完成し1895年3月に原稿を提出するが、ここで、ちょっとした事件が起こる。「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌の主宰者であるアダン夫人から、何の連絡もないまま、原稿がまるめてヴァレリーに返却されるのである。そして、その後、たてつづけに手紙が届き、読者が読みやすい形に「冒頭三ページ分」を書き直してくれないかという要請がなされる。これに対して、ヴァレリーは、怒りを禁じえず、他誌への掲載の道を探るがうまくいかず、掲載先は結局、約束のあった「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」に落ち着くことになる。ただし、実際の掲載はこうした悶着もあって8月15日号にずれこんだ。発表後の友人たちの反応は、大体が戸惑いを隠せないものであったが、1895年9月6日付けのマラルメの手紙は、ヴァレリーの企図に対する十分な理解を詩的に示して見事である。こうした『序説』の存在は、『テスト氏』と共に、いわゆる「ジェノヴァの夜」の神話を相対化することに役立つ。文学放棄と感情制御への「回心」以後も、文学は書かれ、感情は相変わらず危機を経験しつづけている（特に1895年末）。ヴァレリーの第一期の終了地点は1892年ではなく、陸軍省書記官となって「生活」に忙しくなる1897年に置くのが妥当であろう。

ジャルティ氏は、フランス国立図書館所蔵の資料に加えて、フランス学士院図書館所蔵あるいは個人コレクションの未刊行資料などにも目配りを利かせ、ヴァレリーという作家の生き生きとした素顔を実に手堅い手つきで浮き彫りにしている。ファイヤール社刊行予定の伝記の一刻も早い完成を鶴首して待つ次第である。

（東北大学大学院文学研究科助教授）